

市制100周年から始まる未来ビジョンへの道

《安心・元気・子育て》が基盤の産業文化都市

市制100周年は、
次の100年に向けたスタート

今年6月30日、大垣市のシンボル・大垣城に隣接する大垣公園城西広場において、小川敏・大垣市長、稲村和美・尼崎市長、日置敏明・郡上市長の出席の下に「3都市4城連携協定」の締結式が、華々しく実施された。

この締結式は今年4月1日に始まった《大垣市制100周年記念事業》の中でも、メインの一つと位置付けられる重要なイベントである。締結式に臨んだ3都市の市長は、それぞれがまちのシンボルである《城》を活用した観光まちづくりを進めるとともに、3都市の協働による都市間観光の振興事業なども連携・推進し、地域活性化を相互に目指すことを確認し合った。

3都市4城——とうたわわれているのは、まず大垣市に大垣城(大垣市指定史跡)と墨俣

一夜城(大垣市指定史跡)の2城があること。2016年に市制100周年を迎えた尼崎市では現在、記念事業の一環として尼崎城の再建が進められていること(今年4月号の本欄参照)。郡上市には郡上八幡城(岐阜県史跡・郡上市重要文化財)があることなどを、総合的に示している。

「それにしても、なぜこの岐阜県と兵庫県」の3都市が改めて連携協定を結ぶのかと、怪訝けげんに思われる方もあるかもしれません。しかし、連携協定が結ばれた日の午後には『大垣城ゆかりの城シンポジウム』と題するイベントを開催させていただいたことでも分かるように、われわれはまさに『大垣城ゆかりの3都市』なのです。

大垣市には戦前に国宝指定されていた大垣城がございましたが、戦災で残念ながら焼失いたしました。現在の大垣城はその国宝・大垣城を基に1959年(昭和34年)に外観復元されたものです。

おがわ びん
小川 敏
大垣市長



郡上市の郡上

八幡城は1871

年(明治4年)の廃藩置県と

ともに廃城となり、翌年石垣

だけを除いて取り壊されましたが、1933

年(昭和8年)に天守などが再建(木造・模擬

天守)された折り、そのモデルとして国宝・

大垣城が参考にされた経緯がございました。

現在建設中の尼崎城は、1873年(明治

6年)に廃城となり、やはり石垣を除いて取

り壊されました。しかし、尼崎市が一昨年



3都市4城連携協定締結式(左から稲村・尼崎市長、小川市長、日置・郡上市長)

に市制100周年を迎えられた折り、民間の篤志家からの寄附で新たに建設されることになりました。実は、この尼崎城を江戸時代に築城したのは、大垣城を現在の形に整えた美



大垣市民の心の拠り所「大垣城」



松尾芭蕉「奥の細道」の結びの地、大垣のもう一つのシンボル「水門川」(奥の細道むすびの地記念館付近)

濃大垣藩初代藩主・戸田氏鉄うじかねでした。このように郡上八幡城も尼崎城もまさに、



大垣城を《絆》とする《大垣城ゆかりの城》ということになるわけです」
 そう語る小川敏・大垣市長は、さらにこう続ける。「実は私のルーツは逆に尼崎であり、このたびの連携協定の締結とも深い関係があるのでです」
 それはつまり、こういうことである。大垣城の最初の築城は16世紀初頭だが、小川市長が語ったように、これを国宝指定の形に増築し、整えたのは戸田氏鉄である。戸田氏鉄は1635年(寛永12年)に大垣に移封(以後、明治維新まで戸田氏が大垣藩主を歴任)されるまでは、摂津尼崎藩の藩主であり、尼崎城を築造している。
 その戸田氏の旧領だった尼崎で商家を営んでいたのが、小川市長のご先祖で、藩主・戸田氏鉄とともに大垣に移住している。
 大垣市で最も古い中心街・本町地区、水運



水まんじゅうと木枡を使って「同時に食べさせ合いをした最多ペア数」のギネス記録達成

全盛時代の盛り場・船町地区で今も商家などを営む旧家には、小川市長のご先祖と同様、江戸時代初期に尼崎から移住してきたケースが少ないとされる。

このように400年近くも前に始まったまちづくりの伝統を引き継ぎつつ、豊富な水資源を近代的な治水技術で活用し、明治・大正・昭和には紡績産業や発電事業などの近代工業が花開いた大垣市。市制がスタートした1918年（大正7年）は、まさにその真つただ中に当たる時期であった。

100周年記念事業と 大垣駅・南北口の新たなにぎわい

市制100周年にちなみ、小川市長は今年度の予算を「次の100年！スタート予算」と名付けた。折しも今年度は、これまでの第



大垣駅北口、アクアウォーク大垣につながる専用通路

五次総合計画を継承しつつ、長期的な視点で未来のあるべき姿に向けた市政運営の指針である「大垣市未来ビジョン」に基づくまちづくりを開始する初年度でもある。そのため今年度予算は「安心できるまちづくり」「元気があがるまちづくり」「楽しく子育てができるまちづくり」の3つの未来創造戦略に基づく各種事業とともに、100周年記念事業にも、より重点的な予算配分がなされている。

未来創造戦略事業のうち「安心できるまちづくり」事業（計20事業）で目立つのは、2020年に一部完成予定、防災拠点としての役割を重視した市役所の《新庁舎建設事業》である。「元気があがるまちづくり」事業（計29事業）では、ビジネスサポート事業への支援を

はじめとする産業振興のための各種支援事業。「楽しく子育てができるまちづくり」事業（計22事業）では、妊産婦および乳幼児などに対し切れ目のない支援を提供するための《子育て世代包括支援センター事業》などが主要事業となる。

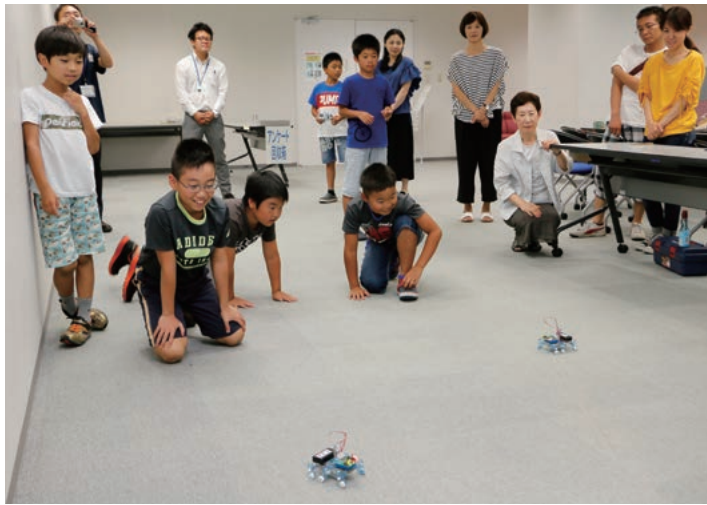
これらに加え、前述のように今年度は市制100周年の各種記念事業（計100事業）が年間を通じ、多彩に開催されている。冒頭の「3都市4城連携協定締結」事業以外にも、主に次のような事業が予定されている（一部は既に開催）。

「記念式典事業（各種アトラクション・イベントなども同時開催）／ギネスに挑戦事業（多数の市民参加による、名物・水まんじゅうと木枡を使い同時に食べさせ合いをした最多ペア数の記録樹立）世界記録達成済み）／ロボカップジャパンおおがき事業（自律移動型ロボットの世界的競技大会『ロボカップ』日本大会）／おおがき大パレード事業（東京ディズニーリゾート35周年スペシャルパレード、朝鮮通信使行列など）／おおがき未来フェスティバル事業（最新ロボットや最先端技術の紹介など、近未来を体験できるイベントや野外音楽ステージなど）／みんなあつまれ！わんぱく親子体操事業（3歳児から小学校2年生までの子どもと保護者が対象のふれあい体操イベント）／全国アニメサミットinおおがき事業（大垣を舞台にしたアニメ『聲の形』などアニメゆかりの地域を集めたサミット、ス

大垣市

市 政 ル ボ

(岐阜県)



夏休み恒例・小学生の「ものづくり体験講座」(情報工房)

タンプラー等) / 三世代健康ウォーキング(高齢者を中心に、三世代による史跡めぐりの健康ウォーキング事業) / 平成30年夏巡業(水の都大相撲大垣場所)ほか」

このように話題性満載、かつ多様な形で始まった大垣市の「次の100年に向けたスタート」にまつわる各種事業――。

それが単なる掛け声だけではない、きちんと「次の100年」への準備(土台)がなされた上での「新たなスタート」であることは、例えば2009年に完成したバリアフリーの南北自由通路とともに、大きく変貌したJR東海&樽見鉄道の大垣駅舎および、北口・南口駅前の現況を見れば如実に分かる。



ユネスコ文化遺産に登録された「大垣祭の軸行車」

「もともと戸田氏鉄が尼崎から大垣に移封されたのは、尼崎城・大垣城を次々に築造した土木・建設事業の才とともに、治水事業にも優れた才があったからとされています。ご承知のように大垣市には《水都》の愛称があります。大垣は木曾三川(木曾川水系の木曾川・長良川・揖斐川)が縦横に流れることから豊かな穀倉地帯となった濃尾平野に位置するわけですが、半面、昔から幾度となく河川の氾濫にも悩まされてきました。

尼崎藩主時代から治水事業に優れた腕を發揮した氏鉄は、関ヶ原にも近く、西国を牽制する戦略上からも重要地点であった大垣藩の

初代藩主となり、城造りとともに治水事業に力を注ぎました。

城下町・大垣のその後の発展は、中山道および中山道と東海道を結ぶ美濃路などの陸上交通網とともに、治水事業の積み重ねの結果として発展した水運事業の隆盛を抜きには語れません。

今も中心市街地に豊かな水辺空間として残る水門川は木曾三川の支流ですが、まるで人工の堀のように市街地に溶け込んでいます。そして大垣の商業は、この水門川沿いに発展していくわけですが、近代以降はこうした豊かな水資源によって、紡績産業や発電事業(揖斐川)などの工業化にも成功しました。その結果、大垣駅の北口側には大正・昭和を通じて広大な紡績工場が建ち並びました。また江戸時代から中心市街地を形成してきた南口側には、繁華な商店街が、水門川沿いに展開していききました。

そして大垣市ではここ10数年、大垣駅北口広場の整備事業や駅南口の南街区再開発事業を行ってまいりました。これは大垣市の産業構造や都市としての立ち位置が、ここに来て再び、大きく変化しつつあることの現れともいえます(小川市長)

名古屋と直結する

《三世代同居都市》の形成

南口の再開発よりも一足早く実施された大

垣駅北口広場整備事業（南北自由通路供用開始）2009年／駅北自転車駐輪場供用開始
2011年／広大な目的別駐車スペースや修景広場などによる北口広場の竣工2012年）は、南北自由通路（水都ブリッジ）と専用通路でつながる形で立地するショッピングモール《アクアウォーク大垣》の出店を抜きに成立しない。

アクアウォーク大垣のアクアは《水都》から来ている。空間デザインの随所に水の流れを意識しているほか、市民活動の拠点となる多目的ホール（アクアホール）、市の子育て支援事業に呼応する「こども図書館」の設置などが行われ、新・中心市街地の活性化を担う民間商業施設の性格を色濃く体現・発信している。そしてこの商業施設および北口広場は、「かつての大垣の産業を支えた大規模繊維工場の跡地の一部」（小川市長）なのである。

反対側の南口の南街区再開発事業においては、3棟の建築物（商業・業務施設と住宅112戸、子育て支援施設「キッズピアおおがき子育て支援センター」が入居する17階建てスイトアベニュー／商業・業務施設が入居する3階建てスイトテラス／駐車・駐輪専用、5階建てのスイトパーキング）が2016年に竣工。さらに今年春には自噴井戸や親水池などが配置された南街区広場も完成し、水門川沿いに展開する旧市街地（伝統的な商業地区、住宅地区）へと連繫している。

「例えばこの南口のスイトアベニューの住

宅に入居しますと雨の日でもほぼ濡れることなく大垣駅に着き、始発の快速電車に乗って30分ほどで名古屋市に通勤できます。そして名古屋駅に着けば、名駅辺りのビル街にはほぼ地下から入れますから、大垣から名古屋までは『傘いらず』で通勤できるということになります（笑）。

それ以外にも大垣駅周辺では現在、15階前後の中層マンションの建設計画が盛んです。また1996年に岐阜県の肝いりで誕生した中部圏の一大IT拠点《ソフトピアジャパン》には、IT関連企業を中心に県内外から約150社の先端企業が集まり、その周辺にも県営住宅などが建設され、働き盛り世代の転入も増え続けています。そのため昼夜間人口比率は東海地方でも屈指になっていますが、東海道本線などの鉄道路線だけでなく、名神高速道路や東海環状自動車道なども活用すれば、名古屋・京都などへの移動はより一層に



子育て支援の最前線施設「キッズピアおおがき子育て支援センター」(スイトアベニュー2F)



沿線3市4町が協力し、上下分離により運行を継続している養老線（市制100周年記念ラッピング仕様）

至便です。

このように新たな環境形成の結果、最近では都会から親元（大垣）の近くに戻り、支え合う、三世代による「近所同居」というべき新しい潮流も生まれつつあります」（小川市長）

大垣市ではこのように、産業構造の変化が、まちの構造の変化だけでなく、親子関係や人口構造の自然な変化の呼び水ともなり、名古屋との連携関係も含め、多様で無理のない変化がもたらされつつあることが分かる。

大垣の市役所新庁舎は 21世紀型・大垣城!?

半面、近年まで順調に人口を増やし続けて

大垣市

市 政 ル ポ

(岐阜県)



中心商店街を挙げて開催される「元気ハツラツ市」(毎月第1日曜)

きた大垣市もまた、人口減少への対策については「妙薬はない」と、小川市長は苦笑する。「東証一部上場企業5社の本社が立地するなど、産業構造の変化やそれに伴う効果的なまちづくりなどにより、働き盛り世代の転入は順調に増えています。ところが出生率の低さは全国の都市と同様で、特効薬はありません。本市としては今後も親子三世代が暮らしやすいまちづくり、働き盛り世代が子育てのしやすいまちづくり、子どもたちがのびのびと育っていける環境を整えるしかありません。

特に健康・医療の充実に関しては、西濃地域の医療の中核を担い、地域屈指の高度

医療を提供できる市立病院・大垣市民病院を中心に、赤ちゃんから高齢者までが明るく、生きがいを持って、安心・安全に暮らしているよう、今後ともあらゆる努力を惜しまないつもりです(小川市長)

総合商社出身の小川市長が、家業である紙商の経営を経て市長に就任したのは2001年。以来、1期目と2期目は「効率的で開かれた行政を目指す」という理念の下、民間企業での経験を生かし、職員に対するコスト意識の醸成、成果主義の導入など庁内改革に重点を置いた。

その成果は、各部署に権限をかなり移譲する、一種の事業部制を敷いたことなどが象徴している。これにより、各部署長は例えば、同一部署内での業務量の変動に応じ、人員配置を柔軟に行えるようになったのだ。

次に3期目からは大垣駅南北口の再開発などハードにも重点を置くようになり、4期目は市民参画の体制づくりに尽力した。

そして5期目を迎えた今、概要をご紹介してきたように「次の100年に向けてのスタート」を切ったわけだが、この5期にわたるまちづくりを通じ、小川市長は「先人が培ってこられた城下町の持つ強みを改めて感じている」という。産業構造の変化などにより、まちの中心は時代とともに何度か移った。それでもまちの動線の軸に大きなブレが生じなかったのは、「大垣城が中心部にあったからこそだと実感している」とも述懐する。



大垣の新たなランドマークとして建設を進めている市役所新庁舎

そうした意味合いからも、大垣城の「丸の内」に立地する現庁舎隣接地に2020年一部完成予定、最重要の防災拠点でありつつ市民の集いの場でもあることを考慮した、使い勝手のいいシンボリック設計が随所になされている「市役所新庁舎」の完成が楽しみだ。「耐震性や免震構造への配慮はもちろん、地域特性を踏まえて、豊富な地下水や太陽光などの自然エネルギーを活用したエコ感覚あふれる庁舎」(小川市長)ともなる市役所新庁舎。さしずめ「21世紀の新・大垣城」ともいべき、安心・安全なランドマークになりそうである。

(取材・文〓遠藤隆／取材日2018年6月23日)